はしがき

いったいいつ頃から、私たちは「青春」という言葉を、気恥ずかしさや懐古的な気分のなかでしか使えなくなってしまったのだろう。もはや少年でも、少女でもない。しかしまだ、大人ではない。この「もはや」と「まだ」の中間に位置する瞬間。そのなかで私たちは煩悶し、暴走し、衝突し、没入し、いまだ知らざる自分と出会う。そんな瞬間が、言葉は廃れても今もまだ若者たちの人生には存在しているのだと信じたい。そしてまさにこの瞬間、人との出会い、本との出会いが、その後の人生を決定するほどの影響力を持つ。

私にとって、それは演劇だった。授業をさぼって新宿や原宿のロック喫茶にたむろする中途半端な高校生だった私にとって、記憶力を試される文系科目はお手上げで、入試対策から理系を選んで「理Ⅰ」に入ったはいいが、学問をずっと続けていくことになるなど思いもよらなかった。そんな私がやがて「文転」を決意するのには、やはり演劇の影響が大きかった。当時、駒場寮裏手に「駒場小劇場」と呼ばれた倉庫的なスペースがあり、そこを拠点に学生諸劇団が活動していた。学部時代、私は授業に出るよりはるかに多くの時間を、如月小春らの劇団綺畸の一員として過ごしていた。当時、わたしが演劇に惹かれたのは、本番の舞台以上に「エチュード」と呼ばれた稽古場のボルテージの高さに原因があった。異なる身体と言葉がぶつかり合い、一回ごとに異なるドラマが生まれてくる。私は次第に演劇という場の力、人々が集まることからドラマが生まれてくることの意味を、自分の人生のなかで可能な限り深く考えてみたいと思うようになっていった。

だから当時、相当数の演劇書をむさぼり読んだ。ピーター・ブルック『なにもない空間』(晶文社、一九七一年)やヤン・コット『シェイクスピアはわれらの同時代人』(白水社、一九六八年)、イェジュ・グロトフスキ『実験演劇論』(テアトロ、一九七一年)、アントナン・アルトー『演劇とその形而上学』(白水社、一九六五年)、フランシス・イエイツ『世界劇場』(晶文社、一九七八年)等々、今も記憶に残っている。唐十郎や寺山修司の演劇論は、まだ本の形ではまとまってはいなかったのではないか。だから、同時代の舞台を観つつ、翻訳版の演劇書を読み、自らのしていることを考えようとしていたのだと思う。もしもそうしたなかで一冊だけを挙げるなら、たぶん私はミハイール・バフチーンの『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(せりか書房、一九七四年)を挙げるだろう。これは、狭義の演劇書ではないのだが、私はこれを演劇書、それも全体主義的な体制のなかで構想された強靭な演劇書として読んだ。

「はしがき」の役割から脱線しすぎた。私の個人史はさておき、本書の価値について述べておく必要がある。本書は何よりも、東京大学の知の中核をなす八〇名の第一線の学者

たちの「青春」が凝縮されているところに魅力がある。その一つ一つが、それぞれの達人がかつてたどった人生の転機、そのなかで本が果たした力をヴィヴィッドに語る。正直、こんなに贅沢な本は滅多にない。この八〇名、いずれも東大の、というよりも日本の知のトップランナーたちばかりである。その彼らが現在につながる自分を見出していった瞬間の「本との出会い」がここに凝縮されている。この一冊にまとめあげられるまで、東京大学新聞は長い時間をかけて寄稿の連載を続けてきた。「えっ、この人がこんな本を読んでいたのか」と驚かされる文章もあるし、「やっぱり、そうだよね」と納得する文章もある。そのすべてに人生があり、それぞれの人生はただ一回だけのものだ。

もちろん、東大教師は決して一般的な人生のモデルではない。相当に特殊な人々で、社会全体がこんな人々だったら、たちまち日本社会は崩壊してしまうだろう。しかし彼らは、日本でもっとも多く本を読み、膨大な知と向き合い、何がしかを本気で深く考え続けた人々なのだ。彼らの「青春の一冊」、つまり人生を決めた一冊を知ることは、冒頭に述べた「すでに」と「まだ」の中間にたたずむ読者の未来に、圧倒的に役立つに違いない。

二〇一三年二月　　東京大学新聞社理事長　吉見　俊哉